



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	食の透視画法(11) : クレオールとしての文化と社会(中)
Author(s)	高井, 哲彦
Citation	しゃりばり, (228), 58-59
Issue Date	2001-02
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52875
Type	article
File Information	charivari228_58.pdf



食の透視画法⑪

クレオールとしての文化と社会 (中)

高井哲彦 北海道大学大学院経済学研究科助教授
同大学院法学研究科附属高等法政教育研究センター研究員



学食ではたくましが横溢

学生時代からいまでも、人に不思議がられながらも大学食堂でばかり食事してきた。北海道の学食で、季節の皿を山盛り薄片に片っ端から試しているうちに、8 kg太った。

日本だけではない。フランスのパリ大、グルノーブル大、リール大、高等師範学校、理工科大学校、ヴィシー高専、イギリスのロンドン大経済学部・東洋学部・クイーンメリーカレッジ、ケンブリッジ大トリニティカレッジ、ドイツのビーレフエルト大、韓国の延世大……、まず学食に足を運んでみた。見よう見まねで皿を取って、席に座り口を動かしてみよう。食べ物に混ざり合った温かい匂いが立ち上る中、一つひとつの会話が重なりあいホール全体がウワーンとした反響で満たされる。場に根ざした学生生活の鼓動が五感で感じられてくる。

外国アクセント同士での会話は、学食以外ではなかなか耳にしない。中国や韓国やロシアなどの多様な留学生たちが、助詞や語尾を省略した片言の日本語文法でも、完璧に理解しあい、時折「ウアッハッハ！」と笑い転げたりしているのを耳にする

と、こちらも頬が緩んでくる。言語や文化の違いを超えて通じあう人類共通の、表現力のしなやかさと主体性のたくましさを感じるのだ。自分の経験とも重なり合う、とやや感傷的にもなる。

25歳で奨学金を得て、偶然からパリに留学した。唐突な無謀とも言われる決断だった。研究対象をイギリスからフランスに変えたため、パリ行きの飛行機の機内でも、あらかじめ「ジュ・ドランジュ、ジュ・ドランジュ」とブツブツ唱まずには、飲み物も頼めなかった。

大江健三郎は「リープ（跳躍）」と呼ぶようだが、人生の大切なことはロジックでなく、案外パッションで決まることがある。海を飛び越えてしまった以上後はない。係累もない場所での自分の居場所を見つけるしかなかった。

「ピジン語」の可能性

子供以下の言葉しかできない自分と決別するべく、春から秋が来るまでフランス語以外の言語を一切話さないと決めた。同国人と会っても「サリユー」と挨拶しフランス語で通したので、いよいよ日本語の輪には誘われなくなった。代わりに増え

たのが、韓国人やメキシコ人らの級友だった。

もちろん、流暢な言葉は話せないが、いい加減なフランス語なりに、毎日連れ立って食事したり、キャンパスの芝生で誕生パーティーを開いたりした。実に良く遊び、良く議論し、笑い泣き怒った。我々「怪しい外国人」のおかしな共通伝言こそ、社会言語学が論争の的としてきた「ピジン語」の一種であったことを、後に帝国Ⅱ植民地の社会史研究の中で学んだ。

「ピジン語」とは、別々の言語を話す話し手が、外国語を体系的に習得せぬまま、その場を切り抜けるために練りだした言語のことである。異なる言語を話すアフリカ諸部族が、17～18世紀に西欧植民者によってカリブ・オセアニア諸島の大規模農園に連れてこられて一緒にされたとき、西欧語を再構造化して意思疎通した——宗主国の視点では「歪めて誤用した」——仲立ち語が典型とされる。

我々留学生は書き言葉を基盤に「正統」な西欧語体系に順応していくため、(発音の癖などは残っても)ピジンのなその場しのぎの用語法は初級段階での「過ち」として消えて

いつてしまふ。しかし、17、18世紀のカリブ海諸島でのビジン語は、プランテーションの黒人奴隷たちが子供を作り新参者を迎えて世代を継承するうちに、体系的な別言語として再構成され、母語としてのクレオール語を作りだすことがあった。

支配者の優勢な言語文化を追隨していた被支配者が、その言語を自分たちなりに「誤用」することによって逆に、新たにもう一つの対等な言語文化を作りだす。この文化のクレオール化現象は、グローバル時代の文化のハイブリッド（混合）化の行方を考える上で、いよいよ重要になっている。

欧州統合協議が本格化した80年代、『英仏ゴチャマゼ語でトークしよう(Let's parler Franglais)』という語学教材仕立てのバロディ本が、権威あるペンギンブックスから出てベストセラーになった。

現在の英国人は、外国語習得率が欧州連合内でも段トツで劣る(他のワースト3はアイルランド人とポルトガル人)。英米人は、かつては植民地にビジン語——いまは世界中に共通語——を押し付ける位置に安住し続け、相手側の言語で必死に切り抜ける経験がなかったという一方通

行に、ブラックユーモアと危機感の核心がある。

ビジンのクレオール化を、言語だけの問題でなく文化一般に適應する議論があるが、仮にそれを採用するならば、食文化の「クレオール化」はとくにダイナミックである。

ラーメン・カレーライスと『タ鵲』

現代日本の大衆食堂で、ラーメンやカレーライスの人気は根強い。日本人の食生活にすっかりなじみ、家庭でもレシピなど見ずに誰もが調理でき、匂いを出すだけで口の中に味の記憶がよみがえるほどである。それぞれ中国と英国(およびインド)が起源であるが、両者は国境を超えるたびに4段階にわたる変身進化を遂げ、最後には独自の「クレオール」的料理として元々の本国側に逆輸入されるに至った。

ラーメンは、第1段階の中華麺が、第2段階で日本のシコシコ麺のラーメンとなった。さらに第3段階でインスタントラーメンが発明されることによって、第4段階では東南・東アジアに逆流し、華僑圏を軸に世界を席巻した。とくに韓国では、インスタントラーメンをむしろ生麺より

好む人すらいて、インスタント激辛麺の開発は多様かつ洗練性が高い。また、インド人の寮仲間たちに「日本料理を作ったから」と夕食会に誘われたことがある。しかし、蓋をあけるとそれは、鍋いっぱい杯に日清『出前一丁』のみをグズグズに茹であげたものであった。我々はその鍋を囲んで頭を揃え、それぞれ熱汁に直接指を突っ込み麺を摘まみあげながら、日本製の晚餐をインド的に楽しんだのだった。

他方、カレーライスは、第1段階でインドの香辛料料理だったものが、第2段階で西洋料理のシチュー料理に化け、第3段階で日本の丼モノ大衆食として定着した。さらに、パリの知識人が集ったモンパルナスの「ラ・クーポールのカレーライス」は、藤田画伯が日本風のレシピを教えたものと伝えられ、在仏日本人の郷愁的だった。これも第4段階で西欧への逆輸入といえよう。

我々の子供時代の70年代には、当時の子供たちの2大好物を組み合わせた「ハンバーグ・カレー」が売り出され、大々的なテレビコマーシャルが毎日流れた。食堂料理としてクレオール化した「カツカレー」に比べ、これは大衆料理の定番に組み込

まれたものとはいえないから、ビジン的なその場しのぎの部分的な現象といえるかもしれない。

団伊久磨の日本語オペラの名作『夕鶴』の魅力もクレオール性にある。ぼくはパリでオペラ座に出会い、インターネットでオペラ日記を連載するほど惚れこんだが、木下順二の戯曲『夕鶴』の歌詞に童謡なども織り込んだ日本語オペラを再発見したときは、「こんなことが可能なのか」と感無量で何度も聴き返した。

オペラは、音楽・詩歌・演劇・美術・舞踏・社交と西欧文化の粋が凝縮された結晶体であるが、団はクラシック音楽家としてそれらを芯まで吸収した上で、日本オペラを作り出した。欧州の場で呼吸し、西欧の土俵で仕事する在欧東洋人として、希望と叱咤を垣間見るような思いがした。

「クレオールとしての文化と社会」は、人間の感性が無限に柔軟であり、日々の生活こそが創造の契機でありうる可能性を夢見させてくれる。

■高井哲彦(たかい てつひこ)氏
1966年生まれ。1990年慶応義塾大学経済学部卒業。仏政府給費留学生を経て、1999年国立パリ社会科学高等研究員博士課程修了。同年より現職。専門分野は西洋経済史、経営史、社会史。